

(2) カーネーション

主要病害虫別防除方法

農薬による防除については、栽培ステージ、病害虫の発生状況等に応じて、散布、灌注、土壌消毒などを行う。
 なお、農薬による防除の際は、農薬登録内容や使用上の注意等を遵守して実施する。

(農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
ウイルス病 (CLV、CNFV、 CVMoV、CERV、 CarMV)	①無病苗を使用する。 ②挿し穂は健全株から採穂するとともに、育苗時に疑わしい症状を示した苗は定植しない。 ③被害株は発見次第取り除く。 ④媒介昆虫であるアブラムシ類の侵入を防ぐ（アブラムシ類の項参照）。 ⑤作業に使用するハサミや手指は、こまめに消毒する。 【参考事項】 CarMV は多犯性であるので、ほ場周辺の除草等、周辺環境衛生にも十分注意する。 CLV、CarMV、CVMoV、CERV は汁液伝染するとされる。
萎凋細菌病 (細菌)	①無病苗を使用する。 ②無病株から採穂した挿し穂を用いる。 ③挿芽箱の消毒など苗床の衛生管理に努める。 ④発病株は隣接株も含めて早めに除去し適切に処分する。挿芽箱で発病した場合は箱内の苗を全て処分する。 ⑤罹病株を切り取った刃物等で健全株を切るとその切り口から伝染するので、注意する。 ⑥栽培終了後は植物残さの処分を丁寧に行う。 【参考事項】 耐病性に品種間差異が見られる。 高温期に発生しやすく、株全体が一気に萎れ症状となり、低温期には茎に2～3 cm の縦の裂け目ができる。 低温期は保菌していても無病徴の場合があり、そこから採穂した穂を定植すると発病する。 茎を切断し水に浸漬すると、切断面から白色の菌泥が流出する
灰色かび病 (<i>Botrytis</i>)	①ハウス内が多湿のとき発生しやすいので、通風を良くし、乾燥を図る。 ②小型斑点のうちに発病花を除去し、適切に処分する。 ③栽培終了後は植物残さの処分を丁寧に行う。
斑点病 (<i>Alternaria</i>)	①被害葉は早めに取り除き、適切に処分する。 ②栽培終了後は植物残さの処分を丁寧に行う。 ③無病株から採穂した挿し穂を用いる。 【参考事項】 主に葉・茎・蕾に発生するが、冷蔵中の苗に発生し苗腐れを起こすことがある。 初発は下葉の葉身に暗緑色水浸状の小斑点が現れ始める。しだいに拡大して病斑部が灰白色～褐色で健全部との境が明瞭な紫色となる。 初期病徴は斑点細菌病と酷似しているが、本病はやや進展した病斑上に黒色すす状の粉（孢子）を形成する。
立枯病 (<i>Fusarium</i>)	①発病株は早めに除去し適切に処分する。 ②栽培終了後は植物残さの処分を丁寧に行う。 ③健全株から採穂した挿し穂を用いる。 ④挿芽箱の消毒など苗床の衛生管理に努める。 ⑤作業に使用するハサミや手指はこまめに消毒する。

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
萎凋病 (<i>Fusarium</i>)	①発病株は早めに除去し適切に処分する。 ②栽培終了後は植物残さの処分を丁寧に行う。 ③健全株から採穂した挿し穂を用いる。 ④挿芽箱の消毒など苗床の衛生管理に努める。 ⑤作業に使用するハサミや手指はこまめに消毒する。 【参考事項】 厚壁胞子の形で土壌中で長期間生存する。 初発は下葉の黄化で、上位葉に広がっていき、下から5～6枚程度まで進むと上位葉の萎凋が始まる。 萎凋症状の現われ方は萎凋細菌病ほど急激でなく徐々に進行する。
さび病 (<i>Uromyces</i>)	①発病葉は早めに取り除き、適切に処分する（茎に発生した場合は、株ごと処分する）。 ②栽培終了後は植物残さの処分を丁寧に行う。 【参考事項】 晩秋から春にかけて発生が多い。
アザミウマ 類	①施設の開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットや0.8mm目合いの赤色系ネットを張り、侵入を防止する。 ②不必要な株、花及びほ場内の雑草は本種の発生源となるので、速やかに処分する。 ③周辺の畑作物や雑草にも寄生するので、防除するか除草する。 ④発生施設では改植時に夏期では7日、春・秋期では14日程度密閉して蒸込みを行い、成虫や蛹を死滅させる。
アブラムシ 類	①施設の開口部に目合い1mm以下の防虫ネットを張り、侵入を防ぐ。 ②ほ場周辺の除草をする。 【参考事項】 ウイルス病を媒介するので、初期防除に重点を置く。
タバコガ、 オオタバコ ガ、 シロイチモ ジヨトウ	①施設の開口部に目合い4mm以下の防虫ネットを張り、侵入を防ぐ。 ②ほ場周辺を除草する。 ③黄色蛍光灯を設置する。 ④被害花蕾は発生次第取り除く。 【参考事項】 夏から初秋にかけて発生が多い。
ハダニ類	①発生源となるほ場周辺の雑草は除草する。